宮城県文化財調査報告書第247集

石川原遺跡 ほか

—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書X—

石川原遺跡、道貫館跡、卯名沢貝塚・卯名沢古墳群
台の下遺跡、高谷貝塚、寺沢遺跡、長平遺跡

平成30年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

石川原遺跡 ほか

—三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書X—

序　文

宮城県東部から北東部を縦貫する三陸沿岸自動車道は、平成29年3月に南三陸海岸IC以南が開通し、東日本大震災により大きな被害を受けた宮城県とりわけ沿岸市町の南三陸町・気仙沼市にとって、復興を加速する大きな一歩となりました。路線内には、豊かな自然や歴史、風土に培われてきた貴重な郷土の文化遺産があり、震災によって失われた人々の絆や人々と地元との結びつきを取り戻すためには、その保存と継承や魅力の再発見が不可欠です。

文化遺産でも、とりわけ土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種開発により常に破壊される恐れがあることから、三陸沿岸自動車道についても、遺跡への影響が最小限となるよう、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所と協議を重ねてまいりました。その結果、平成20・22・24～28年度に当教育委員会が発掘調査を実施することとなった、気仙沼市石川原遺跡ほかの成果を本書に収録しました。この成果が広く県民の皆様や研究者に活用され、地域の再生や人々の絆を取り戻す一助となれば幸いです。

最後になりますが、特に震災後の厳しい環境の中、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に多大なるご協力をいただいた関係機関や地域の皆様、さらに実際の調査にあたられた皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成30年3月

宮城県教育委員会

教育長　髙橋　仁

例　　言

1. 本書は、平成 20・22・24 ～ 28 年度にかけて、宮城県教育委員会が国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき断続的に実施した、三陸沿岸自動車道建設に伴う気仙沼市石川原遺跡ほかの発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。各遺跡の各年度の担当者は各報告の要項に記載した。なお、平成 24 ～ 28 年度は東日本大震災からの復興事業に係る発掘調査として、地方自治法に基づく全国自治体からの派遣職員および多賀城跡調査研究所の支援・協力を得ている。
3. 各遺跡の保存や発掘調査にあたって、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所・気仙沼市教育委員会から多大な協力をいただいた。
4. 本書の遺跡位置図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図を複製して使用した。
5. 各遺跡の測量座標値は世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。方位 N は座標北を表す。
6. 本書で使用した遺構略号は SK：土坑　SN：小溝状遺構群である。
7. 土色の記載は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1994）に依拠した。
8. 遺構図および遺物図の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。
9. 本書は下記の原稿作成者の原稿に基づいて、石川原遺跡を佐藤渉、他を生田和宏が執筆し、それらを含めた全体を生田・佐藤が編集した。

   石川原遺跡（第 1 次・第 2 次）　初鹿野博之　（第 3 次）小澤忠司
   道貫館跡（第 1 次・第 2 次）、長平遺跡（第 1 次）、高谷貝塚隣接地（第 1 次）　初鹿野博之
   卯名沢貝塚・卯名沢古墳群（第 1 次）　岡本泰典

10. 調査成果は、現地説明会、平成 28 年度宮城県遺跡調査成果発表会、文化財保護課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合には、本書がこれに優先する。
11. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目　次

序　文
例　言
目　次
第Ⅰ章　発掘調査に至る経過 …… 1
1　発掘調査の経緯 …… 1
2　調査と記録の方法 …… 2
3　報告書作成の方針 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の環境
1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 5
（1）本吉地区 …… 5
（2）気仙沼・唐桑地区 …… 6

第Ⅲ章　発掘調査
1　石川原遺跡 …… 13
（1）遺跡の環境 …… 13
（2）発掘調査の経過 …… 14
（3）発掘調査の成果 …… 16
1）基本層序 …… 16
2）発見した遺構と遺物 …… 16
a）縄文時代 …… 16
b）中近世以降 …… 21

（4）総括 …… 22
1）縄文時代 …… 22
2）中近世以降 …… 23

2　道貫館跡 …… 27
（1）遺跡の環境 …… 27
（2）発掘調査の経過と成果 …… 27
（3）まとめ …… 27

3　卯名沢貝塚・卯名沢古墳群 …… 30
（1）遺跡の環境 …… 30
（2）発掘調査の経過と成果 …… 30
（3）まとめ …… 32

4　台の下館跡 …… 34
（1）遺跡の環境 …… 34
（2）発掘調査の経過と成果 …… 34
（3）まとめ …… 34

5　高谷貝塚 …… 36
（1）遺跡の環境 …… 36
（2）発掘調査の経過と成果 …… 36
（3）まとめ …… 36

6　寺沢遺跡 …… 38
（1）遺跡の環境 …… 38
（2）発掘調査の経過と成果 …… 38
（3）まとめ …… 38

7　長平遺跡 …… 40
（1）遺跡の環境 …… 40
（2）発掘調査の経過 …… 40
（3）発掘調査の成果 …… 40
（4）総括 …… 42

註・引用・参考文献 …… 43
抄録 …… 44

挿図目次

［発掘調査に至る経過］
第１図　三陸縦貫自動車道の位置 ……1

［遺跡の環境］
第１図　三陸縦貫自動車道と気仙沼市本吉地区の遺跡…7
第２図　気仙沼市本吉地区（部分）の遺跡と地質 ……9
第３図　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡 ……10
第４図　【凡例】三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡と地質 ……11
第５図　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡 ……12

［石川原遺跡］
第１図　調査地点 ……13
第２図　調査区配置図 ……15
第３図　土層柱状図 ……16
第４図　遺構配置図 ……17
第５図　SK1 土坑出土遺物 ……18
第６図　SK1 ～ 4 土坑平面断面図 ……18
第７図　SK5 ～ 7 土坑平面断面図 ……19
第８図　SK6 土坑出土遺物 ……19
第９図　P13・14・16・19・23 柱穴断面図 ……20
第 10 図　遺構外出土の縄文時代の遺物 ……21
第 11 図　SN8 小溝状遺構群（畑跡）平面断面図 ……22
第 12 図　縄文時代の遺構・遺物の分布と集落想定図…23

［道貫館跡］
第１図　調査地点 ……27
第２図　調査区配置図 ……28

［卯名沢貝塚・卯名沢古墳群］
第１図　調査地点 ……30
第２図　土層柱状図 ……30
第３図　調査区配置図 ……31

［台の下遺跡］
第１図　調査地点 ……34
第２図　調査区配置図 ……35

［高谷貝塚］
第１図　調査地点 ……36
第２図　調査区配置図 ……37

［寺沢遺跡］
第１図　調査地点 ……38
第２図　土層柱状図 ……38
第３図　調査区配置図 ……39

［長平遺跡］
第１図　調査地点 ……40
第２図　調査区配置図 ……41
第３図　SK1 平面・断面図 ……41

表目次

［発掘調査に至る経過］
表１　三陸縦貫自動車道の発掘調査遺跡（志津川 IC 以北） ……2

［遺跡の環境］
表１　三陸縦貫自動車道と気仙沼市本吉地区の遺跡一覧 ……8
表２　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡 ……11

［石川原遺跡］
表１　調査年度と調査区 ……14

写真図版目次

［石川原遺跡］
写真図版１　調査地（1） ……24
写真図版２　調査地（2） ……25
写真図版３　調査地（3）・出土遺物 ……26

［道貫館跡］
写真図版１　調査地写真 ……29

［卯名沢貝塚・卯名沢古墳群］
写真図版１　調査地写真（1） ……32
写真図版２　調査地写真（2） ……33

［台の下遺跡］
写真図版１　調査地写真（1） ……34
写真図版２　調査地写真（2） ……35

［高谷貝塚］
写真図版１　調査地写真 ……37

［寺沢遺跡］
写真図版１　調査地写真 ……39

［長平遺跡］
写真図版１　調査地写真 ……42

第Ⅰ章　調査に至る経過

1　発掘調査の経緯

三陸縦貫自動車道（略称：三陸道）は、昭和47～52年に、建設省東北地方建設局（現国土交通省東北地方整備局）・宮城県・仙台市・日本道路公団（現NEXCO東日本）などが、仙台湾高規格幹線道路事業計画を立案した。その経路は仙台市・多賀城市・石巻市・登米市・気仙沼市等を経て、岩手県宮古市に至るものである。

第１図　三陸縦貫自動車道の位置

昭和54年から平成６年にかけて、仙台港北ICから志津川ICまでの各路線が事業化された。これを受け、宮城県教育委員会は、随時分布調査を実施して新たな遺跡の有無を確認するとともに、路線にかかる周知の遺跡については、試掘確認調査を実施した後、建設省東北地方建設局（現国土交通省東北地方整備局）と現状保存の協議を重ねた。その結果、やむを得ず記録保存とした遺跡については、建設工事に先立って発掘調査を実施した。その成果は、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が発掘調査報告書として公表している。（宮城県教育委員会1994a・1994b・1997・2002・2003・2004・2005・2006a・2006b・2007a・2007b、多賀城市教育委員会1991b・1992・1997）。なお、調査後に建設工事が進み、南三陸海岸IC以南の路線は平成29年３月までに全通している。

一方、社会情勢の変化等により、志津川IC以北の事業化は８年後となった。平成14年の「唐桑道路」、平成18年の「本吉気仙沼道路」、平成20年の「南三陸道路」である。前述と同様の手続きを経る中で、気仙沼市内の「本吉気仙沼道路」の路線には、新たに道貫館跡・長平遺跡・寺沢遺跡が発見され、周知の遺跡隣接地である石川原遺跡・高谷貝塚とあわせ、平成20年に石川原遺跡（第１次）、道貫館跡（第１次）、長平遺跡（第１次）、高谷貝塚（第１次）、平成22年に石川原遺跡（第２次）、道貫館跡（第２次）の発掘調査を実施することとなった。

また、平成23年３月11日に東日本大震災が発生し、三陸道は、「命の道」として津波避難、救命救急、生活物資の運搬、ライフラインの復旧等に重要な役割を果たした。そこで「平時には暮らしを支え、災害時には命を守る」機能を持った復興道路「三陸沿岸道路」の一部として新たに位置づけられ、「早期の全線整備が必要」となり（国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所HP）、平成23年に「歌津本吉道路」と「本吉気仙沼道路（Ⅱ期）」「気仙沼道路」「唐桑高田道路」が相次いで事業化された。前述と同様の手続きを経る中で、周知の遺跡として「歌津本吉道路」の路線には、卯名沢貝塚・卯名沢古墳群、「気仙沼道路」の路線には小屋館城跡と忍館跡、周知の遺跡隣接地として「唐桑高田道路」の路線には台の下館跡（現台の下遺跡）が、発掘調査の対象に追加され、平成24年に寺沢遺跡と石

川原遺跡（第３次）、平成 25 年に台の下館跡（現台の下遺跡）、平成 26 年に卯名沢貝塚・卯名沢古墳群（第２次）、平成 27 年に石川原遺跡（第４次）、平成 28 年に石川原遺跡（第５次）、卯名沢貝塚・卯名沢古墳群（第２次）、小屋館城跡（第１次）の発掘調査を実施することとなった。

以上をまとめると、宮城県における三陸道志津川 IC 以北の本発掘調査対象遺跡は、表１のとおりで、すべて気仙沼市内に所在する。

以下、次章の調査成果では、平成 20・22・24 ～ 28 年度に宮城県教育委員会が調査したうち、平成 26 ～ 28 年度に調査した小屋館城跡（第１～３次）を除いた、石川原遺跡など８遺跡（表１網かけ）を、気仙沼市本吉地区と気仙沼地区の順に記述する。

2　調査と記録の方法

各遺跡の調査は、遺跡の内容と広がりを確認し、記録保存することを目的に行った。対象地内にトレンチまたは調査区を設定し、重機または人力で遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げ、さらに人力による遺構検出作業を行った。調査区は遺構の検出状況に応じて、計画路線範囲内で適宜拡張し、検出したすべての遺構を完掘した。ただし、平成 24 年度以降、三陸縦貫自動車道（現三陸沿岸自動車道）が東日本大震災の復興事業となったことを受けて、宮城県教育委員会が定めた「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」の「Ⅱ -2-(3) 本発掘調査の範囲等」の基準が適用された。これにより、平成 24 ～ 28 年度の調査について、切土工事部分は掘削が及ぶ範囲で本発掘調

表１　三陸縦貫自動車道の発掘調査遺跡（志津川 IC 以北）

調査年度	遺跡名（遺跡記号）	所在地（気仙沼市）	調査次数	調査基準	調査担当者	調査期間	調査対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	主な遺構	主な遺物	遺構・遺物の時期	遺物量（平箱数）	報告書名（刊行年）
平成 20 年	石川原遺跡（YM）	本吉町石川原	1次	通常	佐藤（貴）・久保井・村上	12月1日～12月16日		900	54	なし	なし	-	0	本書（2018 年）
	道館館跡（YJ）	本吉町道貫	1次	通常	佐藤（貴）・久保井・村上			2,000	256	なし	磁器	近世	1	
	長平遺跡（YK）	岩欅長平	1次	通常	佐藤（貴）・久保井・村上			6,000	741	土坑	なし	中近世	0	
	高谷貝塚（YL）	松崎高谷	1次	通常	佐藤（貴）・久保井・村上			600	30	なし	なし	-	0	
平成 22 年	石川原遺跡（YM）	本吉町石川原	2次	通常	初鹿野・小野寺・吉田	11月1日～11月9日	3,000	150	なし	なし	-	0	
	道貫館跡（YJ）	本吉町道貫	2次	通常	初鹿野・小野寺・吉田	11月1日～11月9日	2,300	450	なし	なし	-	0	
平成 24 年	寺沢遺跡（YM）	岩欅寺沢	1次	復興	吉川・吉田・西岡（誠）・中川	11月5日～11月13日	4,800	310	なし	なし	-	0	
	石川原遺跡（YM）	本吉町石川原	3次	復興	吉川・豊村・山中・三好・小笹・遠藤	9月10日～9月14日	3,500	375	土坑・ピット	なし	-	0	
平成 25 年	台の下遺跡（YP）	唐桑町台の下	1次	復興	天野・清水上・齋藤	2月18日～8月8日	600	140	なし	なし	-	0	
平成 26 年	卯名沢貝塚（YS）卯名沢古墳群（YT）	本吉町卯名沢	1次	復興	高橋（栄）・遠藤・高橋（透）・堀本	7月28日～8月8日	7,410	155	なし	なし	-	0	
	小屋館城跡（YG）	松崎中瀬	1次	復興	村田・齋藤	11月17日～11月19日	1080	150	なし	なし			
平成 27 年	小屋館城跡（YG）	松崎中瀬	2次	復興	小野	6月23日	450	39	なし	なし			
	石川原遺跡（YM）	本吉町石川原	4次	復興	生田・小野・黒田	12月14日～12月18日	4,000	510	土坑・ピット	土器	縄文晩期	1	
平成 28 年	石川原遺跡（YM）	本吉町石川原	5次	復興	生田・柳田・佐藤・須田	4月12日～6月17日	5,200	955	土坑・ピット	土器・石器	縄文後期	1	
	卯名沢貝塚（YS）卯名沢古墳群（YT）	本吉町卯名沢	2次	復興	生田・須田	6月21日・22日・27日	2,900	100	なし	なし	-	0	
	小屋館城跡（YG）	松崎中瀬	3次	復興	生田・柳田・佐藤・須田・永里	7月4日～12月2日	6,740	2,812	堀・溝	陶器・石器・骨	中世	16	
平成 29 年以降	小屋館城跡	松崎中瀬	4次	復興									
	忍館城跡	入谷山	1次	復興									

査の対象とし、盛土工事部分は基本的に遺構の検出及び部分的な精査のみを行うこととした。具体的な調査範囲については、各遺跡の報告で記述する。

平面図は主に電子平板で作成し、状況に応じて縮尺が 20 分の 1 の手書き実測図を作成した。平面図の基準となる世界測地系に基づく座標点は路線敷予定地の測量杭を利用した。断面図については縮尺が 20 分の 1 の手書き実測図を作成した。また、遺跡内の土層について柱状図を適宜作成し、堆積層や地山の特徴を記録した。また、写真記録についてはデジタルカメラ（1230 万画素）を使用した。

遺構番号は、各遺跡ごとに遺構の種類に関係なく 1 から通し番号を付け、それ以外のピットは遺構番号とは別に 1 から通し番号を付けているが、報告書では遺物が出土している一部のピットを除きピット番号は記載していない。

3　報告書作成の方針

宮城県教育委員会では、報告書作成を含めた復興調査を早期に終了させるため、平成 26 年 2 月に「復興調査に限り報告書の内容を必要最小限に止める」方針を県内各市町村教育委員会に説明している。そのため、平成 26 年度以降に刊行する復興調査に係る報告書については、基本的にこの方針に基づき作成した。

1．重機による表土剥ぎ

2．遺構精査

3．図面作成

4．現地公開

第Ⅱ章　遺跡の環境

1　地理的環境

新制気仙沼市は旧気仙沼市・旧唐桑町・旧本吉町が合併して誕生した市で、宮城県北東端の三陸沿岸に位置する（第１章第１図）。本吉地区は旧本吉町、気仙沼地区は旧気仙沼市域、唐桑地区は旧唐桑町にあたる。地形は、北上山地とそれらを開析して太平洋に流れる河川、河川の周辺に形成された河岸段丘及び谷底平野と沖積低地、太平洋沿岸に発達したリアス式海岸、気仙沼湾入口に位置する独立丘陵の大島（亀山）に大別される。大部分は北上山地山麓の丘陵地で低地は少ない。最高所の標高は、気仙沼市と一関市にまたがる大森山の山頂760 mである。また、北の陸前高田市、西の一関市、登米市、南の南三陸町との境の大半が分水嶺となっており、それらを水源とする各河川は気仙沼湾や小泉湾など太平洋に注ぐ。震災前の土地利用は、湾を臨む沖積地や埋め立て地、河岸段丘上に商業施設・公共施設・住宅が集まった市街地が形成され、リアス式海岸沿い小さな漁業集落、やや狭い谷底平野に農林業の集落や農地が点在していた。その一方で、丘陵地のほとんどは現在でも杉や雑木からなる山林である。

2　歴史的環境

(1)　本吉地区

本地区には52の遺跡が所在する（第１図）。そのほとんどは気仙沼湾とリアス式海岸の湾入に注ぐ河川（津谷川・沖ノ田川等）の中・下流沿いの河岸段丘上及び湾へと突き出す低丘陵上とその緩斜面に立地する。採集品や出土品によって時代が推定できる遺跡の種類と時代をみると、縄文時代17（散布地14、貝塚２、集落１）、弥生時代２（散布地１、貝塚１）、古墳時代２（古墳２）、古代６（散布地４、経塚１、古墳１）、中世29（屋敷４、散布地１、城館21、塚４）、近世７（城館１、一字一石経１、集落１、塚４）となる（※１）。縄文時代の散布地と中世の城館が大半を占める点が特徴である。

震災前のこれらの発掘調査例は少なく調査面積も狭かったことから、全貌が解明された例はほとんどない。その一方で、市史跡前浜貝塚（43）では、縄文時代晩期の貝層やヒト・イヌの墓や後期から晩期の土器、石器、角製品、動物遺存体を発見し、当時の生業や埋葬方法を解明するための多くの資料が得られた（本吉町教育委員会 1979）。また、平貝遺跡（56）では、縄文時代後期・晩期のピット群や墓、近世の掘立柱建物群などを発見し、当時の集落構成を考える手がかりが得られた（本吉町教育委員会 1999）。平貝窯跡（55）では、江戸時代末期から明治時代後半の窯跡を発見し、近世から近代にかけての窯業史の一端を明らかにした（本吉町教育委員会 1999）。これらの発掘調査は、地区のみならず三陸沿岸地域や東北地方の歴史を解明する上での重要な成果として特筆される。

一方、地質については、中生代（白亜系・ジュラ系・三畳系）層が広範囲に分布することが特徴である。特に丘陵から海岸に向かって、中部～下部三畳系の縞状石灰質砂質頁岩・砂岩・礫岩が広く分

布する（本吉町誌編纂委員会 1982、宮城県 1989・1990・1996）。ただし、遺跡は、市街地付近や海岸付近の低地に分布する古生代上部ペルム系の粘板岩や新生代第三系の礫岩上に立地するものが多い（第２図）。

(2) 気仙沼・唐桑地区

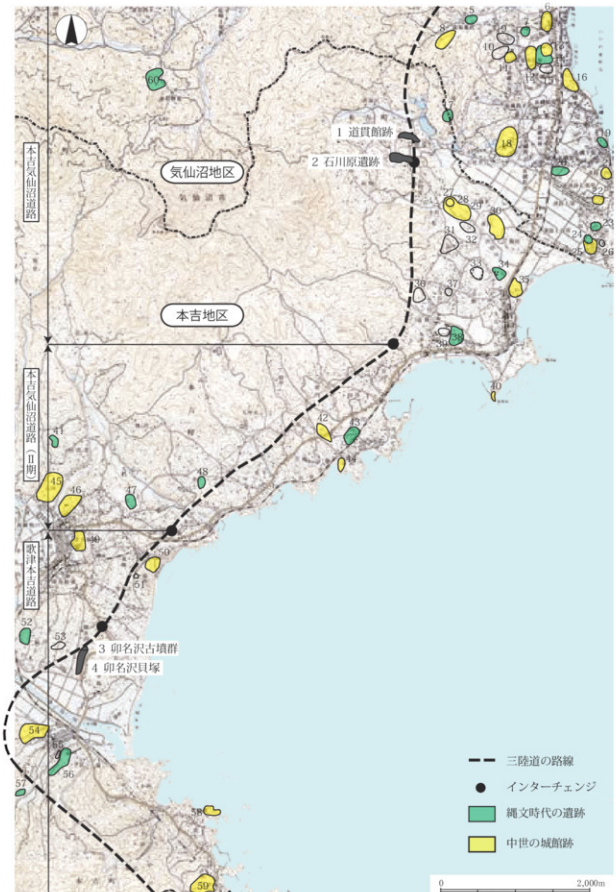
本地区には 129 の遺跡が所在する（第３図）。そのほとんどは気仙沼湾とリアス式海岸の湾入に注ぐ河川（大川・鹿折川等）の中・下流沿の河岸段丘上及び湾へと突き出す低丘陵上とその緩斜面に立地する。唐桑地区には採集品や出土品によって時代が推定できる遺跡が 18 ある。遺跡の種類と時代をみると、縄文時代 10（散布地４、貝塚５、集落１）、弥生時代３（貝塚２、集落１）、平安時代１（集落１）、中世７（城館５、塚２）、近世１（集落１）となる（第２図）（※２）。縄文時代の貝塚と中世の城館が大半を占める点が特徴である。また、気仙沼地区には 111 遺跡ある。遺跡の種類と時代をみると、縄文時代 48（貝塚 14、集落２、散布地 32）、弥生時代３（貝塚２、散布地１）、古墳時代１（集落１）、古代 12（集落３、横穴墓群１、貝塚２、散布地６、）、中世 54（貝塚１、散布地１、城館 52、集落１、板碑群１）となる（※２）。縄文時代の散布地と中世の城館が大半を占める点が特徴である。

震災前のこれらの発掘調査例は少なく調査面積も狭かったことから、全貌が解明された例はほとんどない。その一方で、田柄貝塚（42）では、縄文時代後期の貝層やヒト・イヌの墓を発見したほか、出土した縄文時代後期から晩期の多量の土器、石器、骨角貝製品、動物遺存体の詳細な分析により、当時の食生活や漁猟方法などの動物利用の様相の一端を解明し（宮城県教育委員会 1986）、出土品の一部は平成 10 年に重要文化財に指定された。また、陣山館跡（35）では、発見した５箇所の郭や土塁、空堀、掘立柱建物跡、井戸跡の分析から、熊谷氏の支城または出城であったと考えられたこと（気仙沼市史編さん委員会 1998）などは、地区のみならず三陸沿岸地域や東北地方の歴史を解明する上での重要な成果として特筆される。

一方、地質については、古生代ペルム系から中生代白亜系までの地層が揃ってみられ、日本の地質を研究する上で重要な場所として知られる（気仙沼市史編さん委員会 1986、宮城県 1974・1989・1990・1996）。遺跡はペルム系上部の粘板岩・中部の砂質頁岩や礫岩の時代が古く安定した岩盤上に立地するものが多い（第５図）。

註

※１・２　時代が複数にまたがる遺跡もあるため、時代が推定できる遺跡の数と時代別の遺跡数の和は一致しない。

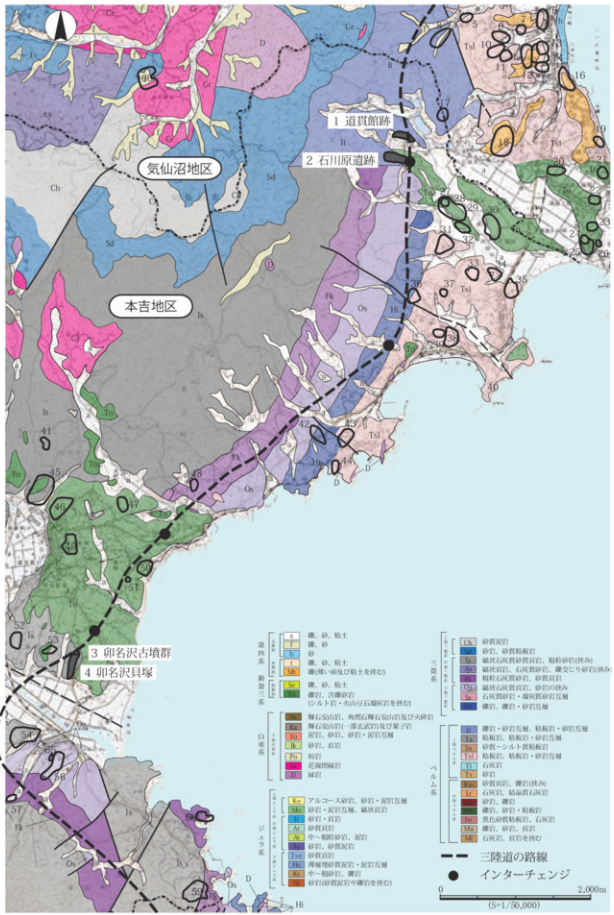


第１図　三陸縦貫自動車道と気仙沼市本吉地区の遺跡

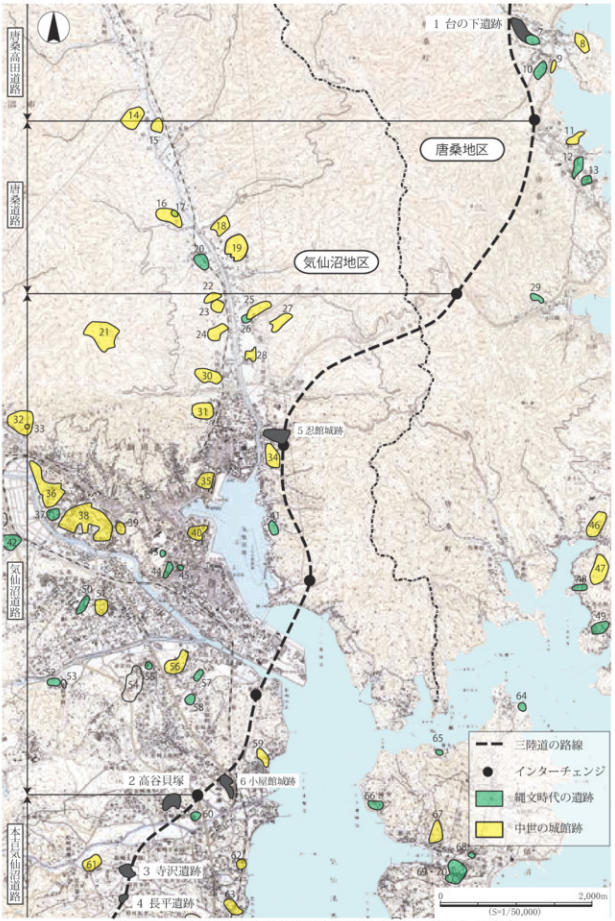
表１　三陸縦貫自動車道と気仙沼市本吉地区の遺跡一覧

No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	**道貫館跡**	**丘陵**	**城館**	**中世・近世**
2	**石川原遺跡**	**丘陵**	**散布地**	**縄文後・晩**
3	**卵名沢古墳群**	**丘陵**	**古墳**	**古墳**
4	**卵名沢貝塚**	**丘陵斜面**	**貝塚**	**縄文前～後・弥生**
5	荒沢遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
6	猿喰東館跡	丘陵麓	城館	中世
7	緑館遺跡	丘陵	散布地	縄文中
8	猿喰西館跡	丘陵斜面	城館	中世
9	海蔵寺北遺跡	丘陵	集落	古代
10	海蔵寺遺跡	丘陵	集落	古代
11	塚館跡	丘陵	城館	中世
12	最知中館跡	丘陵	城館	中世
13	末永館跡	丘陵	城館	中世
14	○南最知貝塚	丘陵斜面	貝塚・集落	縄文前・中・古墳後
15	長磯高遺跡	丘陵	散布地	古代
16	森館跡	丘陵	城館	中世
17	昌浦沢遺跡	丘陵	散布地	縄文
18	南最知城跡	丘陵	城館	中世
19	長磯浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
20	内田遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
21	堀合館跡	丘陵	城館	中世
22	波路上東館跡	丘陵	城館	中世
23	杉の下貝塚	丘陵	貝塚	縄文
24	波路上西遺跡	丘陵	散布地	縄文
25	波路上西館跡	丘陵	城館	中世
26	杉の下南遺跡	丘陵麓	散布地・集落	奈良・平安
27	直伝遺跡	丘陵	散布地	縄文
28	上久戦場館跡	丘陵	城館	中世
29	塚館跡	丘陵	城館	中世
30	堀合館跡	丘陵	城館	中世
31	峰平館跡	丘陵	屋敷	中世
32	洞館跡	丘陵	屋敷	中世
33	照館跡	丘陵	屋敷	中世
34	野々下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
35	風京館跡	丘陵	城館	中世
36	照合館跡	丘陵麓	屋敷	中世
37	寺谷古墳群	丘陵斜面	古墳	奈良
38	中学校付近遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
39	三島古墳群	丘陵	円墳	古墳後
40	鳴壷館跡	丘陵麓	城館	中世
41	坊ノ倉西館遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中
42	府中館跡	丘陵	城館	中世
43	前浜貝塚	丘陵	貝塚	縄文後・晩
44	平磯古館跡	丘陵	城館	中世
45	峰岸館跡	丘陵	城館	中世
46	津谷館跡	丘陵	城館	中世
47	大門遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
48	曲要滞松下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
49	田屋館跡	丘陵	城館	中世
50	風越古館跡	丘陵	城館	中世
51	道外の供養碑	丘陵	一字一石経	近世
52	岡の沢遺跡	丘陵	散布地	縄文
53	宇南田塚群	丘陵	塚	
54	小泉館跡	丘陵	城館	中世
55	平貝窯跡	丘陵斜面	窯跡	近代初期
56	平貝遺跡	丘陵斜面	散布地・集落	縄文前・後・晩 弥生・古代・近世
57	外尾遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
58	前ノ森館跡	丘陵	城館	中世
59	蔵内中館跡	丘陵	城館	中世
60	物見遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文後・晩

○　市史跡



第２図　気仙沼市本吉地区（部分）の遺跡と地質



第３図　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡

表２　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡

№	遺跡名	立地	種別	時代	№	遺跡名	立地	種別	時代
1	台の下遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・平安・近世	36	新庄館跡	丘陵	城館	中世
2	高谷貝塚	丘陵	貝塚	縄文	37	旭ヶ丘遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前
3	寺沢遺跡	丘陵斜面	散布地	古代・近世	38	長崎城跡	丘陵	集落・城館	古代・中世
4	長平遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	39	気仙沼古館跡	丘陵	城館	中世
5	岩館城跡	丘陵麓	城館	中世	40	細浦城跡	丘陵	城館	中世
6	小泥館跡	丘陵麓	城館	中世	41	○浦島貝塚	丘陵斜面	集落・貝塚	縄文前～晩
7	台の下貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文中～晩・弥生	42	田柄貝塚	丘陵	貝塚	縄文早～晩・弥生中
8	出山館跡	丘陵	城館	中世	43	気仙沼中学校前遺跡	丘陵	散布地	縄文
9	朝日館跡	丘陵麓	城館	中世	44	○内の脇2号貝塚	丘陵	貝塚	縄文前
10	波坂楽館遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	45	○内の脇1号貝塚	丘陵	貝塚	縄文中・後
11	八幡館跡	丘陵	城館	中世	46	唐桑城跡	丘陵	城館	中世
12	岩井沢貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文晩	47	南館跡	丘陵	城館	中世
13	蔵鉢遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	48	藤ヶ浜貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文前・中・晩・弥生
14	佐名館跡	丘陵	城館	中世	49	古館貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前～後
15	白鳥城跡	丘陵	城館	中世	50	九条遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古代
16	愛宕館跡	丘陵	城館	中世	51	谷地館跡	丘陵麓	城館	中世
17	両沢遺跡	丘陵	散布地	縄文・平安	52	平貝遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
18	興福寺裏の館跡	丘陵	城館	中世	53	平貝窯跡	丘陵斜面	窯跡	近世・近代
19	興福寺前の館跡	丘陵	城館	中世	54	石兜貝塚	段丘	貝塚	古代・中世
20	西中才貝塚	段丘	貝塚	縄文後・晩	55	赤岩遺跡	段丘	散布地	縄文
21	鍋越山館跡	丘陵	城館	中世	56	館森館跡	丘陵斜面	城館	中世
22	小小尻館跡	丘陵	城館	中世	57	松岩貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文後・晩
23	松舘城跡	丘陵	城館	中世	58	老の松遺跡	丘陵斜面	集落	縄文後
24	岩崎館跡	丘陵	城館	中世	59	大館跡	丘陵麓	城館	中世
25	浄念寺北館跡	丘陵	城館	中世	60	高谷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
26	東中才遺跡	丘陵麓	散布地	縄文	61	古館跡	丘陵	城館	中世
27	浄念寺南城跡	丘陵	城館	中世	62	八幡館跡	丘陵	城館	中世
28	東八幡館跡	丘陵麓	城館	中世	63	相馬館跡	丘陵麓	城館	中世
29	只越遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	64	外浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
30	西八幡前の館跡	丘陵	城館	中世	65	菊萌遺跡	丘陵麓	散布地	縄文晩
31	刈米館跡	丘陵	城館	中世	66	○磯草貝塚	段丘	貝塚	縄文前～晩
32	赤岩城跡	丘陵	城館	中世	67	大島古館跡	段丘	城館	中世
33	赤岩館経塚	丘陵斜面	経塚	近世	68	○浦の浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前
34	小泥館跡	丘陵麓	城館	中世	69	裏方A貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文前・中・晩
35	陣山館跡	丘陵	城館	中世	70	裏方B遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前・中

○　市史跡

第４図【凡例】　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡と地質

第５図　三陸縦貫自動車道と唐桑地区・気仙沼地区（部分）の遺跡と地質

第Ⅲ章　発　掘　調　査

1　石川原遺跡

所在地：宮城県気仙沼市本吉町石川原

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

平成 20 年度（第 1 次）佐藤貴志、久保井裕之、村上裕次

平成 22 年度（第 2 次）初鹿野博之、小野寺淳一、古田和誠

平成 24 年度（第 3 次）古川一明、豊村幸宏、山中信宏、三好秀樹（多賀城跡調査研究所）
小澤忠司（岐阜県派遣）、遠藤武（愛媛県派遣）

平成 27 年度（第 4 次）生田和宏、小野章太郎、黒田智章

平成 28 年度（第 5 次）生田和宏、傳田恵隆、佐藤渉、須田正久（群馬県派遣）

調査期間：（第 1 次）平成 20 年 12 月 1 日～ 12 月 16 日

（第 2 次）平成 22 年 11 月 1 日～ 11 月 9 日

（第 3 次）平成 24 年 9 月 10 日～ 9 月 14 日

（第 4 次）平成 27 年 12 月 14 日～ 12 月 18 日

（第 5 次）平成 28 年 4 月 12 日～ 6 月 10 日

（1）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市本吉町石川原に所在する縄文時代後・晩期の散布地として登録されている（県遺跡地名表登録番号 62002）。市街地から約 8 km 南、大谷海岸から 2.5 km 西に位置し、北上山地から延びる丘陵上の平坦地から南東緩斜面に立地する（第 1 図、第Ⅱ章の第 1 図）。その標高は約 43 ～ 65 m で、現在は主に林地や畑地、水田となっている。なお、縄文時代後期の土器や多数の石鏃、石錐、石斧、石匙などの石器が採集されている（本吉町誌編纂員会 1982）。

第 1 図　調査地点
(S=1/25,000)

遺跡周辺の丘陵には、縄文時代から中世の遺跡が分布する。とくに縄文時代の貝塚・散布地と中世城館が多い（第 1 図、第Ⅱ章の第 1 図）。

縄文時代の遺跡は、主に海岸付近の丘陵縁辺に分布している。菖蒲沢遺跡（17）では、縄文時代中

期の土器片や石鏃、石匙など多数の石器が採集されている（本吉町誌編纂委員会 1982）。また南最知貝塚（14）では、縄文時代中期の竪穴建物、土壙墓のほか、縄文時代前期初頭から後期初頭の遺構・遺物が発見されている（宮城県教育委員会 1979・気仙沼市史編さん委員会 1988）。前浜貝塚（43）では、縄文時代晩期の土壙墓から仰臥屈葬の成人骨が発見されている（本吉町教育委員会 1979）。

弥生時代以降の遺跡と調査例は少ない。集落では、南最知貝塚（14）で古墳時代終末期の竪穴建物1軒が発見されている（宮城県教育委員会 1979）。古墳では、明治時代の宅地造成や大正時代の発掘で須恵器の蓋、鉄製の剣柄、勾玉・切子玉・管玉、ガラス製小玉が発見された古墳時代終末期の三島古墳群（39）が知られる（本吉町誌編纂委員会 1982）。中世の遺跡は、土久戦場館跡（28）や堀合館跡（30）など城館が多い。

表1　調査年度と調査区（＊は本調査）

調査年度（次数）	区	トレンチ	遺構	遺物	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）
H20（1次）	D	T1	なし	なし	900	50
		T2				
H22（2次）	D	T3	なし	なし	3,000	150
		T4				
		T5				
		T6				
		T7				
		T8				
		T9				
		T10				
		T11				
H24（3次）	A	＊T12	土坑2、柱穴1	縄文土器 石器	3,500	＊180
		T13	ピット群			195
		T14	なし			
		T15				
		T16				
		T17				
		T18				
		T19				
		T20				
H27（4次）	A	T21	なし	縄文土器	4,000	510
		T22	ピット1			
		T23	ピット1			
		T24	ピット1			
		T25	なし			
		T26				
		T27				
		T28				
		T29	ピット3			
		T30	なし			
		T31				
		T32				
		T33				
		T34				
		T35				
	B	T36	なし			
		T37				
		T38				
		T39				
		T40				
		T41				
		T42				
		T43				
		T44				
	C	T45	ピット1			
		T46	小溝状遺構群 ピット1			
		T47	小溝状遺構群			
		T48	なし			
H28（5次）	＊A		土坑3、柱穴群	縄文土器 石器	5,200	＊860
	＊B		なし			
	＊C		土坑1 小溝状遺構群			
	C	T49	なし			13
		T50				13
		T51				22
		＊T52	土坑1			＊30
	E	T53	なし			8
		T54				8

（2）発掘調査の経過

調査地は、遺跡の東側で丘陵平坦地から南東緩斜面とその南の低地にあたる。平成20年度から平成28年度にかけて、断続的に計5回の調査を実施した（表1）。

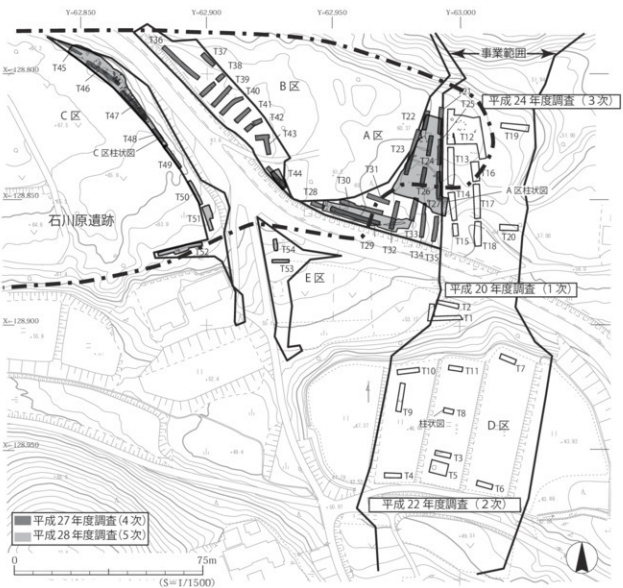
まず、本遺跡は、東西・南北の道路で調査地を分け（A・B区、C区、D・E区）、さらに事業区域によって、A～E区に設定した（第2図）。

平成20年度（第1次調査）　調査地は遺跡の東隣接地で小丘陵の南斜面にあたる。D区本線部の盛土部について、平成20年12月1日、T1・T2のトレンチを設定し、厚さ約10cmの表土等を除去して遺構面であるⅢa層を検出した。その結果、遺構・遺物は発見されなかった。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、12月16日に調査地を事業者に引き渡した。

平成22年度（第2次調査）　調査地は遺跡の東隣接地で第1次調査区の南の低地部にあたる。D区本線部の盛土部について、平成22年11月1日、T3～T11のトレンチを設定し調査の安全が確保されうる限りにおいて、遺構面であるⅢ層の検出に努めた。その結果、T3～8・11でⅢa層、T9・10でⅡb層とⅢa層を検出したが、遺構・遺物は発見されなかった。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、11月9

日に調査地を事業者に引き渡した。

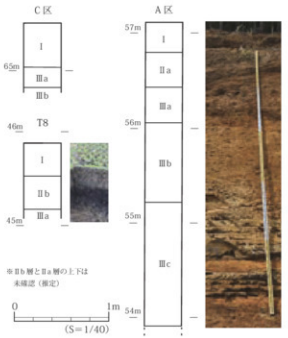
平成 24 年度（第３次調査）　調査地は遺跡の東隣接地で第１次調査区の北の小丘陵の東斜面にあたる。A区本線部の切土部について、平成 24 年９月 10 日、T12 ～ T20 のトレンチを設定し、厚さ 10 ～ 90cm の表土等を除去してⅢａ層を検出した。その結果、T13・15・16・19・20 でⅢａ層、T14・17・18 で、Ⅱａ層とⅢａ層を検出したが、遺構・遺物は発見されなかった。また、T12 では、縄文時代とみられる土坑・ピットを発見した。そこでトレンチを拡張し、遺構の分布を確認したところ、さらに複数の土坑とピットを発見した。そのため９月 12 日から 14 日まで精査を行い、平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った。そして 14 日に調査地を事業者に引き渡した。この調査結果を受けて、遺跡が東に広がることが判明した。なお、最終的に発見した遺構は土坑３とピット群で、遺物は縄文土器と石器が平箱１箱分となった。



第２図　調査区配置図

平成27年度（第4次調査）　調査地は、遺跡の東端付近で小丘陵の東斜面にあたる。A・B区・C区北部・E区のインターチェンジと取付道路の切土部について、平成27年12月14日から、T21～T48のトレンチを設定し、厚さ10～30cmの表土等を除去して遺構面であるⅢa層を検出した。その結果、T22～24・29・45・46では、縄文時代とみられるピット、T46・47では、中近世以降の小溝状遺構群（畑跡）を発見した。なお、その他のトレンチからは、遺構は遺構・遺物は発見されなかった。一方、遺構・遺物が発見されたトレンチとその周辺は、さらに遺構が発見される可能性が高いため、周辺も含めた精査は、次年度に行うこととし、平面図を作成して写真撮影を行うに留めた。そして18日に調査区を埋戻した。なお、遺物は縄文土器と石器が平箱1箱分出土した。

平成28年度（第5次調査）　調査地は遺跡の南東にあたり、①第4次調査で遺構が発見されたA区・B区南東・C区北の切土部、②C区南とE区の取付道路の切土部である。まず、①A区について4月4日から調査を開始し、B区、C区北、②C区南のT49～52、E区の順に、厚さ20～80cmの表土等を除去して遺構面であるⅢa層を検出した。その結果、A区では、縄文時代の土坑・柱穴群・ピット、T52では縄文時代の土坑、C区北では縄文時代の土坑と中近世の小溝状遺構群（畑跡）を発見した。そのため各調査区とトレンチについて引き続き精査を行い、平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った。そして5月9日にA区、6月10日にその他の調査区を事業者に引き渡し、調査を終了した。また、平成28年6月2日、3日には、地元向けに現地を公開し、29名来跡した。



層位	土色	土性	特徴	備考
Ⅰ	暗褐色（10YR3/3）	シルト	耕作土、盛土。	表土
Ⅱa	黒褐色（10RY3/1）	シルト質粘土	A区中央のT27・14・17で確認。	沢の堆積
Ⅱb	黒色（10YR2/1）	粘土	礫・植物遺存体を多く含む。低地部のT9・10で確認。	湿地性堆積
Ⅲa	にぶい黄褐色（10RY4/3）	粘土質シルト	C区北・E区を除いた遺構検出面。	地山
Ⅲb	黄褐色（10RY5/6）	粘土質シルト	砂大の礫を多く含む。C区北・E区の遺構検出面。	地山（岩盤）
Ⅲc	黒褐色（10YR3/2）明黄褐色（10YR6/6）	礫	粘板岩の互層。	地山（岩盤）

第3図　土層柱状図

（3）発掘調査の成果

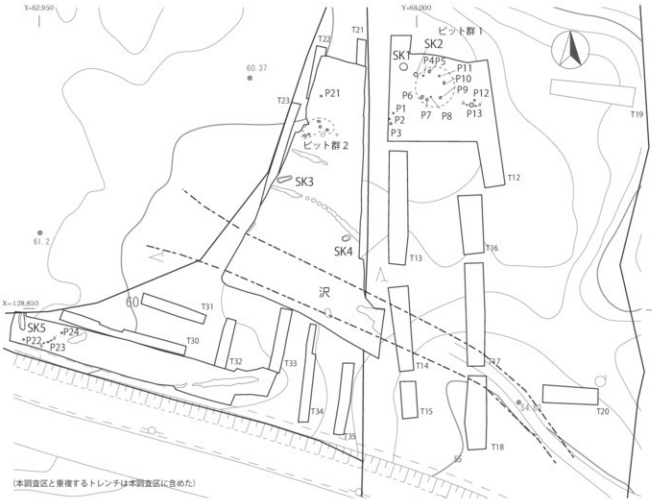
1）基本層序（第3図）

丘陵斜面と低地部では層序に違いがあるが、以下のⅠ～Ⅲ層に大別できた。Ⅰ層は近現代の表土や耕作土、盛土である。Ⅱ層は沢や低地でみられる黒色粘土の自然堆積層である。Ⅲ層は遺構検出面とした地山層である。

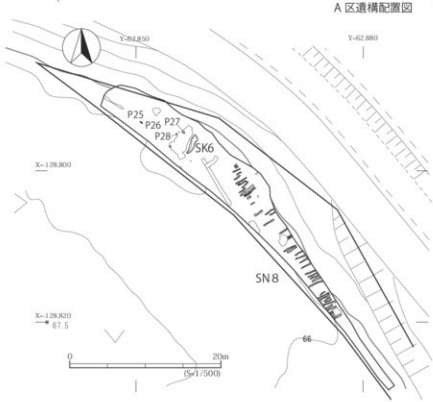
2）発見した遺構と遺物

a）縄文時代

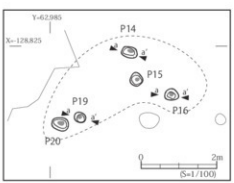
遺構は、土坑7基、ピット24基を検出した（第4図）。遺物は、縄文土器、石鏃・石匙の未製品・楔形石器・不定形石器、剥片が平箱2箱分出土した。



A 区遺構配置図



C 区遺構配置図



A 区ビット群 2 詳細図

T52 遺構配置図

第 4 図　遺構配置図

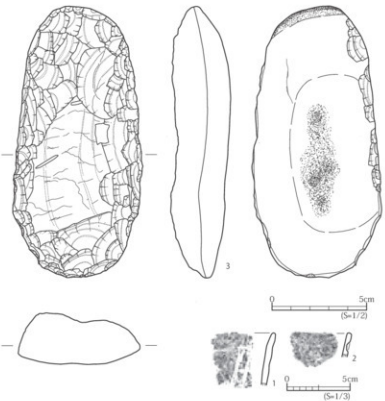


図	層	器種	特徴	写真図版	登録番号
1	1 層	縄文土器深鉢	縦横の沈線	3-5-2	Po42
2	1 層	縄文土器深鉢	井筒通孔 1 箇所	3-5-3	Po43
3	2 層	打製石斧	砂岩、長さ 142mm、67mm、厚 26mm、凹石を転用	3-5-1	№ 44

第５図　SK １土坑　出土遺物

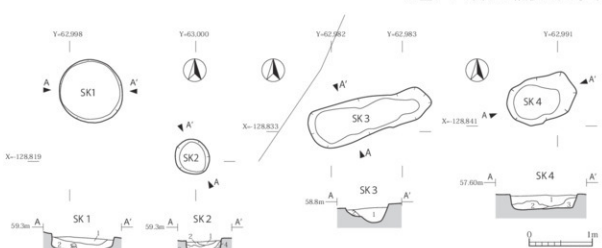
①土坑

【SK １土坑】

A区T12 北で検出した（第４・６図）。平面は径 1.1m のほぼ円形を呈し、深さは 0.3 m、断面形は箱形である。堆積土は２層に分けられる。炭化物、地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻される。遺物は、１層から縄文土器深鉢の口縁（第５図１・２）、体部、底部の小片、２層から打製石斧（写真図版３- ５- １）、磨石、剥片が出土した。

【SK ２土坑】

A区T12 北側で検出した（第４・６図）。平面は、径 0.6m のほぼ円形を呈し、深さは 0.3m、断面は壁がやや開いた箱形である。堆



遺構	層	土色	土性	特徴
SK1	1	暗褐色（5YR3/4）	シルト	炭化物粒・地山ブロック大を少し含む、人為堆積。
	2	暗褐色（7.5YR3/2）	シルト	炭化物粒を多く含む、地山ブロック大を少し含む、人為堆積。
SK2	1	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物粒・地山ブロック大を多く含む、人為堆積。
	2	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山ブロック大を多く含む、炭化物粒を少し含む、人為堆積。
	3	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	地山ブロック小を多く含む、炭化物粒少し含む、人為堆積。
	4	褐色（7.5YR4/3）	シルト	地山ブロック大を多く含む、人為堆積。
	5	灰褐色（7.5YR4/2）	粘土質シルト	地山ブロック小を多く含む、人為堆積。
SK3	1	黒褐色（10YR3/2）	粘質シルト	地山ブロック小を少し含む、自然堆積。
	2	にぶい黄橙色（10YR7/4）	粘質シルト	地山ブロック小を多く含む（細粒土）、自然堆積。
SK4	1	褐灰色（10YR4/1）	砂質シルト	地山粒・炭化物粒を少し含む、自然堆積。
	2	にぶい黄橙色（10YR6/3）	砂質シルト	地山粒・炭化物粒をわずかに含む、自然堆積。
	3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	砂質シルト	自然堆積。

第６図　SK １～４土坑平面断面図

積土は５層に分けられる。主に炭化物、地山ブロックを含む褐色シルトで埋め戻される。遺物は、縄文土器深鉢の体部小片、剥片が出土した。

【SK ３土坑】

A区北で検出した（第４・６図）。平面は、長軸２ｍ×短軸 0.7m の楕円形を呈し、深さは 0.3m、断面は鉢形である。堆積土は２層に分けられる。主に地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

【SK ４土坑】

A区南東で検出した（第４・６図）。平面は、長軸 1.1m ×短軸 0.7m の楕円形を呈し、深さは 0.2 m、断面は箱形である。堆積土は３層に分けられる。主ににぶい黄橙色砂質シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

【SK ５土坑】

A区西端で検出した（第４・７図）。平面は、長軸 2.4m 以上×短軸 0.8m の楕円形を呈すとみられ、深さは 0.4 m、断面は皿形である。堆積土は１層で、地山粒を少量含む黄褐色粘土質シルトが自然堆積する。遺物は縄文土器深

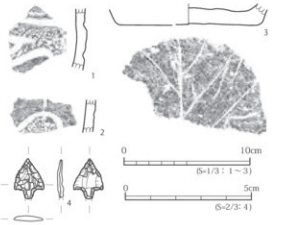
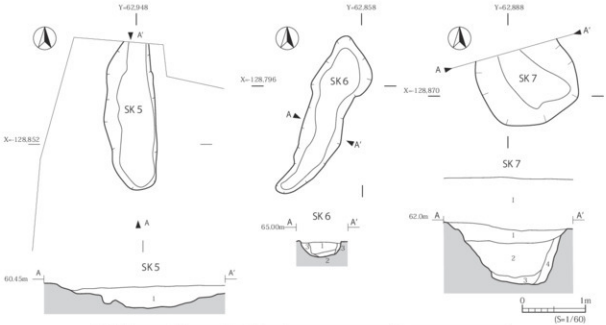


図	層	器種	特徴	写真図版	登録番号
1	1 層	縄文土器深鉢	弧状沈線、横位沈線、縄文LR（網消）	3-5-5	Po.34
2	1 層	縄文土器深鉢	弧状沈線、縄文LR（網消）	3-5-6	Po.33
3	1 層	縄文土器深鉢	木葉痕	3-5-7	Po.37
4	1 層	石鏃	脚上、長さ 16mm、幅 12mm、厚さ 2mm	3-5-9	No.36

第８図　SK ６土坑　出土遺物



遺構	層	土色	土性	特徴
SK5	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘質シルト	地山粒少し含む、しまりあり。自然堆積。
SK6	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	縄文土器片多く含む。自然堆積。
	2	褐灰色 (10YR4/1)	シルト質粘土	地山ブロック小を少し含む。自然堆積。
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	地山ブロック小を少し含む。自然堆積。
SK7	1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	粘性強い、自然堆積。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	地山粒を多く含む。しまりあり。自然堆積。
	3	黄褐色 (10YR5/8)	粘質シルト	地山粒をわずかに含む。しまりややあり。自然堆積。
	4	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	地山崩落土を非常に多く含む。自然堆積。

第７図　SK ５～７土坑平面断面図

鉢の体部小片が出土した。

【SK 6 土坑】

C 区北で検出した（第 4 ・ 7 図、写真図版 2 - 2）。平面は、長軸 2.6m ×短軸 0.7m の崩れた楕円形を呈し、深さは 0.2 m、断面は U 字形である。堆積土は 3 層に分けられる。 1 層は縄文土器片を多量に含む黒色シルト質粘土、2・3 層は地山ブロックを少量含む褐色シルト質粘土が自然堆積する。遺物は 1 層からのみ出土した（第 8 図）。縄文土器は、深鉢とみられる多数の土器片が出土した。体部が横位の沈線と弧状の沈線で縄文帯と無文帯を区画するもの（第 8 図 1 ・2）、波状の口縁となるもの（写真図版 3 - 5 - 8 ）がみられる。石器は、有茎の石鏃（第 8 図 4 ）、剥片が出土した。

【SK7 土坑】

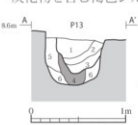
C 区の T52 中央で検出した（第 4 ・ 7 図）。平面は、長軸 1.5m ×短軸 1.2m 以上の楕円形を呈し、深さは 1 m、断面は箱形である。堆積土は 4 層に分けられる。 1 層は粘性の強い褐色粘土質シルト、2 ～ 4 層は地山粒を含む黄褐色粘土質シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

②ピット

ピットは、24 基検出した。このうち 8 基で柱痕跡を確認したほか、2 か所でピットに一定のまとまりがみられた。

【ピット群 1 】

A 区 T12 中央で南北 5 m、東西 5 m の範囲でまとまる P4 ～ P11 の 8 基を検出した（第 4 図）。平面は円形または楕円形で、長径 22 ～ 50cm×短径 18 ～ 39cm、深さ 10 ～ 25cm ほどである。堆積土は、炭化物を含む褐色シルトである。遺物は出土していない。



柱穴	層	土色	土性	特徴	備考
P13	1	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物粒を多く含む。縄文土器細片少し含む。	柱抜取穴
	2	褐色（7.5YR4/6）	シルト	炭化物粒を多く含む	
	3	褐色（7.5YR4/6）	シルト	炭化物粒を非常に多く含む	
	4	明褐色（7.5YR5/6）	シルト	炭化物粒をわずかに含む	柱痕跡
	5	明褐色（7.5YR5/8）	シルト	掘方埋土	柱掘方
	6	明褐色（7.5YR5/6）	シルト	掘方埋土	
P14	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物やや多く含む	柱痕跡
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物少し含む	柱掘方
	3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト質粘土		
P16	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物やや多く含む。	柱痕跡
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物少し含む	柱掘方
	3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト質粘土		
P19	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物やや多く含む	柱痕跡
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物少し含む	柱掘方
	3	黒褐色（10YR3/1）	シルト質粘土		
P23	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	炭化物・地山粒を少し含む	柱痕跡
	2	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト質粘土		柱掘方

第 9 図　P13・14・16・19・23　柱穴断面図

【ピット群 2 】

A 区北で南北 2 m、東西 4 m の範囲でまとまる P14 ～ 16、P19・20 の 5 基を検出した（第 4 ・ 9 図）。掘方の平面は円形または楕円形で、長径 30 ～ 40cm×短径 25 ～ 34cm で、深さ約 10 ～ 25cm ほどである。掘方埋土は、褐灰色のシルト質粘土であるものが多い。柱痕跡の平面形は、円形で径 10 ～ 15cm、深さ 10 ～ 25cm ほどである。堆積土は、炭化物を少量含む褐灰色の粘土質シルトである。

【その他の柱穴】

A 区 T12 で P13、A 区西で P22 ～ 24 を検出した（第 4 図）。P13 には、抜取穴がみられ、炭化物を多く含む褐色シルトが

自然堆積する。1層から縄文土器深鉢の細片と剥片が出土した。P22 ～ 24 は掘方の平面は楕円形で、長径 27 ～ 30cm×短径 21 ～ 25cm、深さ 20cm ほどである。掘方埋土は黄橙色シルト質粘土である。柱痕跡は、径 10cm～ 15cm、深さ 20cm ほどである。堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

【その他のピット】

C 区北側で P25 ～ P28 を検出した（第 4 図）。平面は円形で径 15 ～ 30cm、深さ 20cm ほどである。堆積土は、地山ブロックを多く含む褐灰色の粘土質シルトが自然堆積する。遺物は、P 1・9・12 から縄文土器深鉢片が出土した。

③遺構外出土の縄文時代の遺物

遺構確認面、倒木痕から縄文土器の小片、石鏃・石匙の未成品・楔形石器・不定形石器、剥片などの石器が出土した（第 10 図）。以下、遺物の時期が推定できる遺物について述べる。

A 区南の倒木痕から出土した縄文土器深鉢（第 10 図 1 ～ 3）は、外面のみ条痕文がみられ、胎土に少量の繊維を含む。これらの土器は、特徴から前期前葉頃と考えられる。A 区のⅡa 層から出土した縄文土器深鉢（第 10 図 4）は、口縁部が緩やかな波状口縁で、体部には複節縄文がみられ、胎土に少量の繊維を含む。特徴から前期初頭頃と考えられる。C 区遺構検出面から出土した縄文土器（第 10 図 7・8）は、横位の縦横の沈線による区画がみられる。特徴から縄文時代後期中葉頃と考えられる。C 区北の遺構確認面から出土した縄文土器浅鉢は（写真図版 3- 5-18）、口唇部に 2 つの粘土粒が付き、口縁部には 5 本の横位沈線が観察される。特徴から晩期前葉～中葉と考えられる。石匙の未成品　（写真図版 3 － 5 － 19）も C 区北の遺構確認面で出土した。

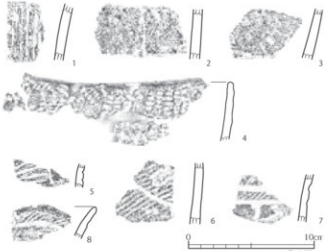


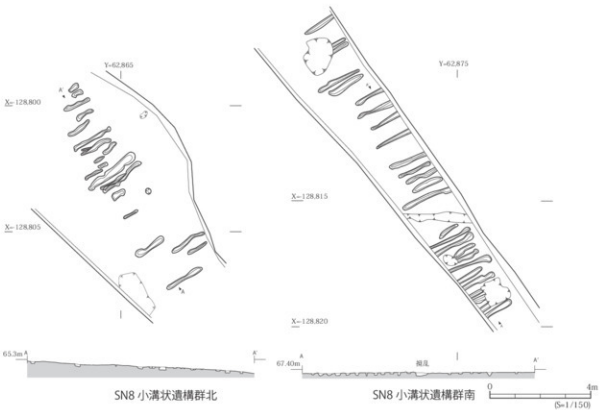
図	調査区／層など	器種	特徴	写真図版	登録番号
1	A区倒木痕	深鉢	条痕文、胎土に繊維を少し含む	3-5-10	Po1
2	A区倒木痕	深鉢	条痕文、胎土に繊維を少し含む	3-5-11	Po6
3	A区倒木痕	深鉢	条痕文、胎土に繊維を少し含む	3-5-12	Po4
4	A区遺構確認面	深鉢	複節縄文ＲＬＬか、胎土に繊維を少し含む	3-5-13	Po41
5	C区遺構確認面	深鉢	沈線、縄文ＬＲ（磨消）	3-5-14	Po15
6	C区遺構確認面	深鉢	縄文ＬＲ（磨消）	3-5-15	Po27
7	C区遺構確認面	深鉢	横位沈線、縄文ＬＲ（磨消）	3-5-16	Po28
8	C区遺構確認面	深鉢	沈線、縄文ＬＲ（磨消）	3-5-17	Po40

第 10 図　遺構外出土の縄文時代の遺物

b）中近世以降

①小溝状遺構群

【SN8 小溝状遺構群（畑跡）】（第 4 ・11 図）。



遺構	層	土色	土性	特徴
SN8	1	褐灰色 (10YR1/5)	シルト質粘土	地山ブロック大を多く含む。自然堆積。

第 11 図　SN 8 小溝状溝遺構群（畑跡）平面断面図

C 区中央で溝 47 条を検出した。各溝の間隔は 0.1 ～ 1.2m であるが、0.3m 間隔のものが多い。上幅は 0.1 ～ 0.3m、下幅は 0.1 ～ 0.2m、深さは 0.1m である。断面は U 字形または箱形で、堆積土は褐灰色シルト質粘土が自然堆積する。方向は約 N-60° -E である。遺物は出土していない。

（4）総括

遺構としては SK 1 ～ 7 土坑、ピット群を検出した。遺構の分布は、A 区東から南の平坦地と緩斜面、C 区東側の緩斜面で確認され、A 区の南東緩斜面、B 区の平坦面、E 区の南斜面、D 区の低地部分ではみられなかった。基本層Ⅲ層の検出状況から、現在の地形と縄文時代の地形はおおむね同じであったとみられる。

出土遺物は、縄文土器と石器がある。縄文土器は大半が深鉢体部で、いずれも細片で摩耗が激しく、接合するものはほとんどない。石器は、石鏃、石匙の未成品、打製石斧、楔形石器、不定形石器、磨石、剥片がある。

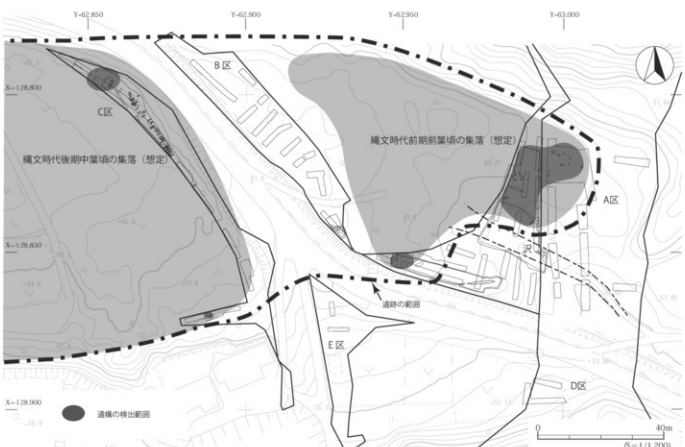
出土土器から遺構の時期が分かるのは、A 区 SK 1 土坑、C 区 SK 6 土坑がある。SK 1 土坑の縄文土器は、半截竹管による平行沈線、非貫通の孔をもつ（第 5 図 2）。文様の特徴からおおむね前期前葉頃とみられる。SK 6 土坑の縄文土器は、波状口縁の破片（写真図版 3 － 5 － 8）、横位沈線や弧状沈線で縄文帯と無文帯を区画する体部の破片（第 8 図 1 ・ 2）がある。文様などの特徴からおおむね後期中葉頃とみられる。

遺構外の出土ではあるが、A区出土の縄文土器は、いずれも胎土に少量の繊維を含み、文様は条痕文と複節縄文とみられる縄文が施される（第10図1～4）。その特徴から前期前葉頃とみられ、A区の遺構も同時期とみられる。C区出土の縄文土器は、横位沈線とその間に縄文が施される（第10図5・6・7）。その特徴から後期中葉頃とみられることから、C区の遺構も同時期とみられる。

以上からA区では縄文時代前期前葉頃、C区では縄文時代後期中葉頃の遺構・遺物が分布すると考えられる。地形や遺構の検出状況、遺物の出土状況から、今回の調査区はいずれも居住域の縁辺部とみられる。ピット群が確認されたことから、標高60m前後のA区とB区の間の平坦地に縄文時代前期前葉頃、標高65m前後のC区の西に広がる南東緩斜面に縄文時代後期中葉頃の居住域が広がると推定できる。

2）中近世以降

C区で小溝状遺構群を検出した。丘陵平坦地が広がるC区付近は、畑であったと考えられる。



第12図　縄文時代の遺構・遺物の分布と集落想定図

1. A区調査前（南から）

2. A区全景（南から）

3. A区T12全景（南西から）

4. A区T18基本層断面（南から）

5. SK1土坑断面（南から）

6. SK3土坑断面（東から）

7. ピット群2（西から）

8. P13柱穴断面（南から）

写真図版1　調査地（1）

1. B 区全景（北西から）

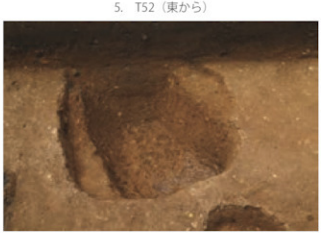
2. B 区 T36（南から）

3. C 区北検出（南から）

4. C 区 T50・51（南から）

5. T52（東から）

6. SK6 土坑断面（西から）



7. SK7 土坑断面（南から）

8. SN8・9 小溝状遺構群（北から）

写真図版 2　調査地（2）

1. D区T1（北東から）

2. D区低地部分全景（西から）

3. D区T10（南東から）

4. E区T53（西から）

5. 出土遺物

写真図版3　調査地（3）・出土遺物

2　道貫館跡

所在地：気仙沼市本吉町道貫
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　平成 20 年度　佐藤貴志　久保井裕之　村上裕次
　　平成 22 年度　初鹿野博之　小野寺淳一　古田和誠
調査期間：平成 20 年 12 月 1 日～ 12 月 16 日
　　平成 22 年 11 月 1 日～ 11 月 9 日
調査対象面積：約 4,300㎡
調査面積：約 710㎡

第 1 図　調査地点
(S=1/25,000)

（1）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市本吉町道貫に所在する中世の館跡として登録されている（県遺跡地名表登載番号 62056）。市街地から約 7.2km 南西で気仙沼湾入口にあたる岩井崎から約 4 km 西に位置し、西から東へと延びる小丘陵の平坦面及び丘陵緩斜面に立地する（第 1 図、第Ⅱ章の第 1 図）。その標高は 62 ～ 78m で、現況は主に山林や宅地となっている。

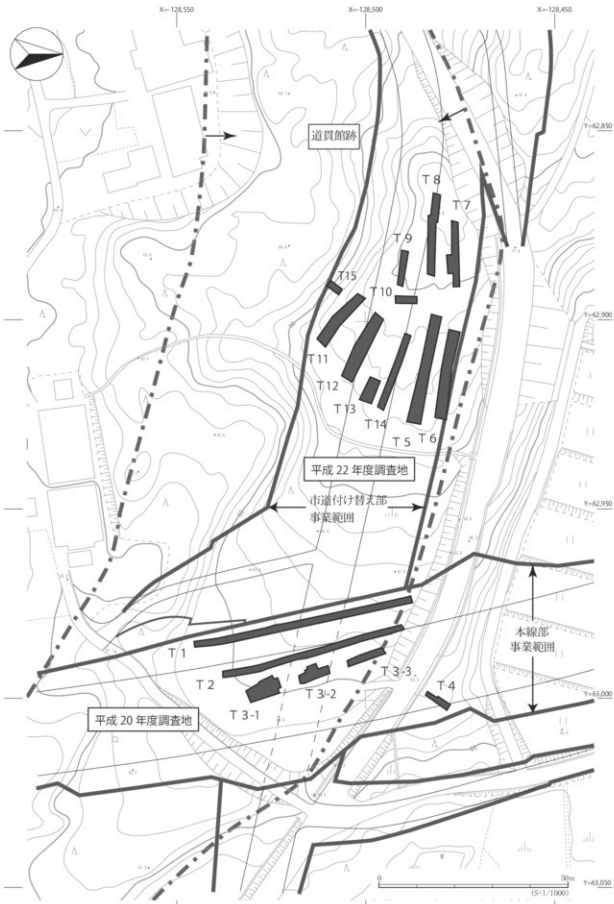
（2）発掘調査の経過と成果

調査地は遺跡の西部と北隣接地で、小丘陵上の平坦面及び東緩斜面にあたる。まず、本線部の切土部について、平成 20 年 12 月 1 日、T 1 ～ 4 の調査区を設定し、厚さ 20 ～ 50㎝の表土等を除去して遺構面である黄褐色土の地山を検出した（第 2 図）。その結果、遺構・遺物は発見されなかった（第 2 図、写真図版 1 ）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、12 月 16 日に調査地を事業者に引き渡した。

その後、市道付け替え部について、平成 22 年 11 月 1 日、T 5 ～ 14 の調査区を設定し、厚さ 20 ～ 50㎝の表土等を除去して遺構面である黄褐色土の地山を検出した（第 1 図）。その結果、遺構・遺物は発見されなかった（第 2 図、写真図版 1 ）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、11 月 9 日に調査地を事業者に引き渡し、調査を終了した。

（3）まとめ

調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の南緩斜面は、自然の傾斜地であったと考えられる。遺構は隣接する北東側の丘陵緩斜面に広がると考えられる。


X=-128,550
X=-128,500
X=-128,450
Y=62,850
Y=62,900
Y=62,950
Y=63,000
Y=63,050
道賀館跡
T 8
T 7
T 9
T15
T 10
T11
T12
T 13
T14
T 5
T 6
平成 22 年度調査地
市道付け替え部
事業範囲
本線部
事業範囲
T 1
T 2
T 3-1
T 3-2
T 3-3
T 4
平成 20 年度調査地
0
50m
(S=1/1000)

第 2 図　調査区配置図

1．T11 全景（東から）

2．T12 全景（東から）

3．T 4全景（東から）

4．T 5～15 全景（西から）

5．T 5全景（東から）

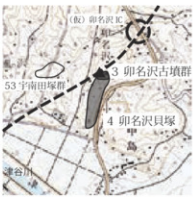
6．T 8全景（西から）

7．T15 全景（南から）

8．T 1全景（北から）

写真図版1　調査地写真

3　卯名沢貝塚・卯名沢古墳群



第１図　調査地点
(S=1/25,000)

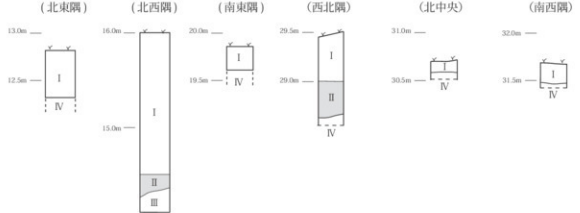
所在地：気仙沼市本吉町卯名沢
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　平成 26 年度　高橋栄一　遠藤則靖
　　高橋透（多賀城跡調査研究所）
　　岡本泰典（岡山県派遣）
　　平成 28 年度　生田和宏　須田正久（群馬県派遣）
調査期間：平成 26 年７月 28 日～８月８日
　　平成 27 年６月 21・22・27 日
調査対象面積：約 10,300㎡
調査面積：約 255㎡

（１）遺跡の環境

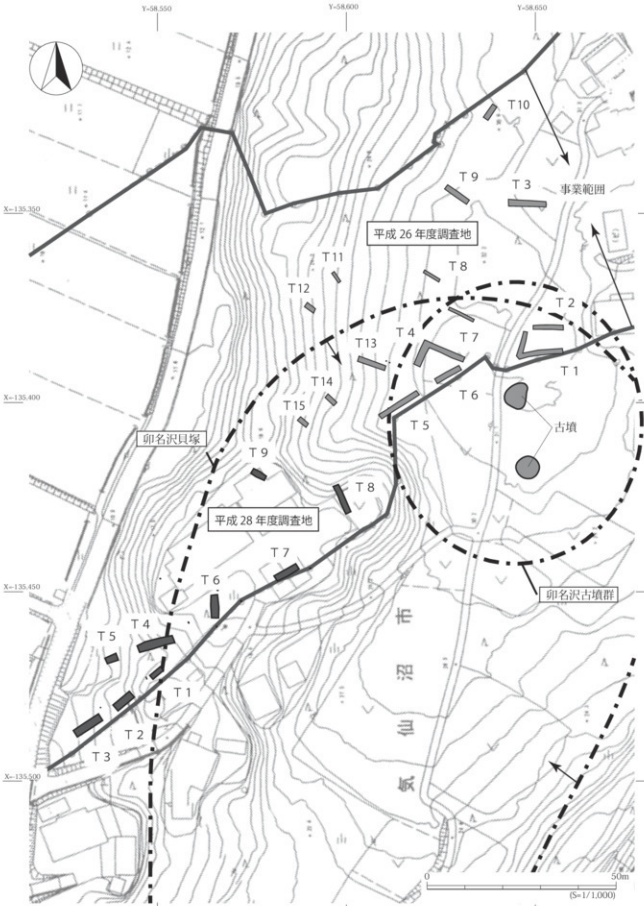
両遺跡は、気仙沼市本吉町卯名沢に所在し、卯名沢貝塚は縄文時代前期から後期と弥生時代の貝塚、卯名沢古墳群は時期不明の古墳として登録されている（県遺跡地名表登載番号 62015・62041）。市街地から約 15.6km 南西の小泉湾奥に注ぐ津谷川左岸に位置し、北から南樹枝状に延びる小丘陵上とその斜面に立地する（第１図、第Ⅱ章の第１図）。その標高は 10 ～ 32m で、現況は主に畑地や林地となっている。貝塚は遺跡南東の東側斜面がその分布の中心とされる。また古墳は遺跡中央に径７m 前後の円墳が２基みられる。

（２）発掘調査の経過と成果

調査地は遺跡の北西部と北・西隣接地で、小丘陵上の平坦面及び西緩斜面にあたる。まず、平成



第２図　土層柱状図


Y=58,550
Y=58,600
Y=58,650
X=-135,350
X=-135,400
X=-135,450
X=-135,500
T10
T9
T3
事業範囲
平成 26 年度調査地
T11
T8
T12
T2
T4
T7
T13
T1
T14
T6
T15
T5
古墳
卵名沢貝塚
T9
T8
平成 28 年度調査地
T7
T6
卵名沢古墳群
T4
T5
T1
T2
T3
北沼川
0
50m
(S=1/1,000)

第３図　調査区配置図

26年7月28日、主に盛土となる小丘陵上の北部と西斜面にＴ１～15の調査区を設定し、厚さ10～90㎝の表土等を除去して、遺構面である地山を検出した（第２・３図）。その結果、基本層はⅠ層：表土・盛土、Ⅱ層：旧表土、Ⅲ層：黄褐色砂質シルト（丘陵流入土）、Ⅳ層：黄褐色礫（地山）であった（第２図）。Ｔ５・８でⅡ層を検出したが、遺構・遺物は発見されなかった（第２図、写真図版１・２）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、調査区を埋戻し、８月８日に調査地を事業者に引き渡した。

平成27年は、平成26年度調査地の南西部の遺跡西斜面に、平成27年６月21日、Ｔ１～９の調査区を設定し、厚さ0.2～２ｍの表土等を除去して遺構面であるⅣ層を検出した（第１図）。その結果、Ｔ１・２・６でⅡ層を検出したが、遺構・遺物は発見されなかった（第２・３図、写真図版１・２）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、調査区を埋戻し、６月27日に調査地を事業者に引き渡し、調査を終了した。

（３）まとめ

調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の平坦面と西緩斜面は、自然の傾斜地であり、宅地造成の際に一部切土・盛土されたと考えられる。縄文時代の貝塚や集落等の遺構は、南部の丘陵平坦面及び東斜面に広がると考えられる。

1．調査地遠景（西から）

2．古墳群付近（北西から）

3．H26　Ｔ１全景（北西から）

4．H26　Ｔ４全景（北東から）

写真図版１　調査地写真（１）

1．H26　T５全景（東から）

2．H26　T６全景（南西から）

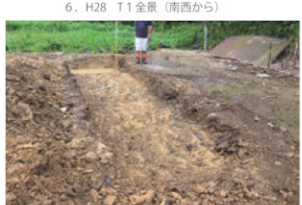
3．H26　T９全景（北西から）

4．H26　T13全景（西から）

5．H26　T15全景（北西から）

6．H28　T１全景（南西から）

7．H28　T３全景（北東から）

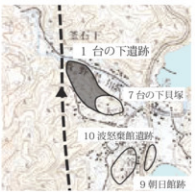


8．H28　T７全景（南西から）

写真図版２　調査地写真（２）

4　台の下遺跡

所在地：気仙沼市唐桑町台の下
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮地県教育庁文化財保護課
　　天野順陽　清水上政憲　齋藤和機
調査期間：平成 26 年２月 18 日・２月 19 日
調査対象面積：約 600㎡
調査面積：約 140㎡



第１図　調査地点
(S=1/25,000)

（１）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市唐桑町台の下に所在する縄文・弥生・平安時代、近世の集落として登録されている（県遺跡地名表登載番号 63009）。市街地から約８km 北東の広田湾中央西側に注ぐ青野沢川右岸に位置し、北西から南東に突き出た小丘陵の頂部平坦面及び丘陵緩斜面に立地する（第１図、第Ⅱ章の第３図）。その標高は２～ 60m で、現況は主に山林や宅地となっている。

（２）発掘調査の経過と成果

調査地は遺跡の西隣接地で小丘陵の東緩斜面にあたる。平成 26 年２月 18 日、切土となる範囲の西部にＴ１～５の調査区を設定し、厚さ 50㎝の表土等を除去して遺構面である凝灰岩の岩盤を検出した（第２図）。その結果、遺構・遺物は発見されなかった（第２図、写真図版１・２）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、２月 18 日に調査地を事業者に引き渡し、調査を終了した。

（３）まとめ

調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の南緩斜面は、自然の傾斜地であったと考えられる。集落等の遺構は隣接する北東側の丘陵緩斜面に広がると考えられる。

１．遺跡遠景（南東から）

２．Ｔ２全景（東から）

写真図版１　調査地写真（１）

1．Ｔ３全景（南東から）

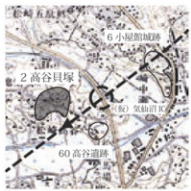
2．Ｔ５全景（北東から）

写真図版２　調査地写真（２）

第２図　調査区配置図

5　高谷貝塚

所在地：気仙沼市松崎高谷
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮地県教育庁文化財保護課
　　佐藤貴志　久保井裕之　村上裕次
調査期間：平成 20 年 12 月 1 日～ 12 月 16 日
調査対象面積：約 600㎡
調査面積：約 30㎡



第 1 図　調査地点
(S=1/25,000)

（1）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市松崎高谷に所在する縄文時代の貝塚として登録されている（県遺跡地名表登載番号 59094）。市街地から約 4 km 南の気仙沼湾中央西側に注ぐ面瀬川左岸に位置し、西から東に突き出た小丘陵尾根の東側緩斜面に立地する（第 1 図、第Ⅱ章の第 3 図）。その標高は 15 ～ 16m で、現況は主に畑地や宅地となっている。なお、遺跡中央部の小丘陵の南緩斜面が貝層分布の範囲と推定されている。

（2）発掘調査の経過と成果

調査地は遺跡の南隣接地で小丘陵の南緩斜面にあたる。平成 20 年 12 月 1 日、切土となる対象範囲の北半部に T 1 ～ 5 の調査区を設定し、厚さ 10 ～ 60㎝の表土等を除去して遺構面である凝灰岩混じりの地山を検出した（第 2 図）。その結果、遺構・遺物は発見されなかった（第 2 図、写真図版 1・2）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、12 月 26 日に調査地を事業者に引き渡し、調査を終了した。

（3）まとめ

調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の南緩斜面は、現畑地の造成等により若干の切土・盛土による地形改変があったと考えられる。縄文時代の貝塚や集落等の遺構は隣接する北側の丘陵緩斜面及び平坦面に広がると考えられる。

第２図　調査区配置図

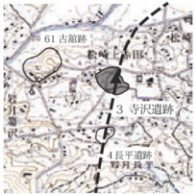
１．調査区近景（北から）

２．Ｔ１全景（南から）

写真図版１　調査地写真

6　寺沢遺跡

所在地：気仙沼市岩槻寺沢
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮地県教育庁文化財保護課
　　古川一明　古田和誠
　　西岡誠司（神戸市派遣）　中川寧（島根県派遣）
調査期間：平成 24 年 11 月 5 日～ 11 月 13 日
調査対象面積：約 4,800㎡
調査面積：約 310㎡



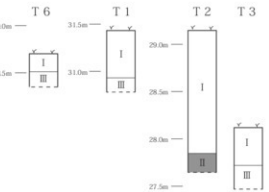
第 1 図　調査地点
(S=1/25,000)

（1）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市岩槻寺沢に所在する古代・近世の散布地として登録されている（県遺跡地名表登載番号 59111）。市街地から約 5 km 南で気仙沼湾中央の西沿岸から 1.5km 西に位置し、南西から北東に樹枝状に延びる小丘陵尾根の南側緩斜面に立地する（第 1 図、第Ⅱ章の第 3 図）。その標高は 25 ～ 37m で、現況は主に田畑となっている。

（2）発掘調査の経過と成果

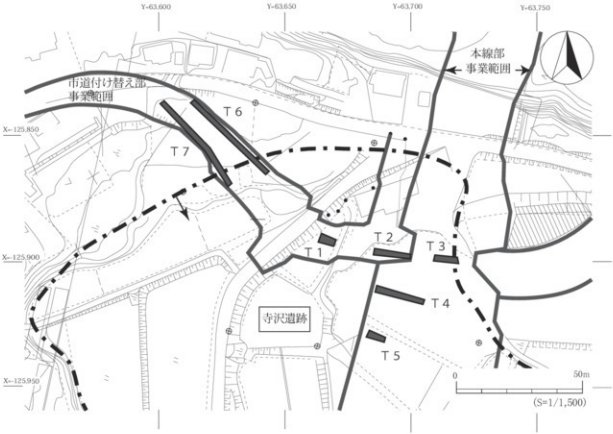
調査地は遺跡の中央やや北側で小丘陵の南緩斜面にあたる。平成 24 年 11 月 5 日、主に切土となる本線部の北半部と市道付替え部の西部に T 1 ～ 7 の調査区を設定し、表土等を除去して調査の安全が確保される限りにおいて、遺構面である地山の検出に努めた。その結果、基本層は Ⅰ層：表土・盛土、Ⅱ層：明緑灰色砂混じり粘土（沢の堆積土）、Ⅲ層：黄褐色シルト質粘土・砂（地山）であった（第 2 図）。T 1・3・6・7 で Ⅲ層、T 2・4・5 で Ⅱ層を検出したが、遺構・遺物は発見されなかった（第 2・3 図、写真図版 1）。そのため調査区の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、調査区を埋戻し、11 月 13 日に調査地を事業者に引き渡して調査を終了した。



第 2 図　土層柱状図（S=1/40）

（3）まとめ

調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の南緩斜面は、現田畑地の造成にあたり、丘陵斜面の高所を切土し、低所である小さな沢に盛土して形成されたとみられる。縄文時代の集落等の遺構は、遺跡の西部から北西部に広がると考えられる。



第３図　調査区配置図

１．遺跡遠景（南東から）

２．Ｔ１全景（南東から）

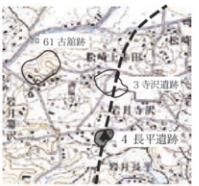
３．Ｔ２全景（西から）

４．Ｔ６・７全景（北西から）

写真図版１　調査地写真

7　長平遺跡

所在地：気仙沼市岩槻長平
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮地県教育庁文化財保護課
　　佐藤貴志　久保井裕之　村上裕次
調査期間：平成 20 年 12 月 1 日～ 12 月 16 日
調査対象面積：約 6,000㎡
調査面積：約 740㎡



第 1 図　調査地点
(S=1/25,000)

（1）遺跡の環境

本遺跡は、気仙沼市岩槻長平に所在する縄文時代の散布地として登録されている（県遺跡地名表登載番号 59110）。市街地から約 5.3km 南で、気仙沼湾中央の西沿岸から 1.6km 西に位置し、、西から東に樹枝状に延びる小丘陵尾根の平坦面及び南側緩斜面に立地する（第 1 図、第Ⅱ章の第 3 図）。その標高は 28 ～ 38m で、現況は主に宅地や畑地となっている。

（2）発掘調査の経過

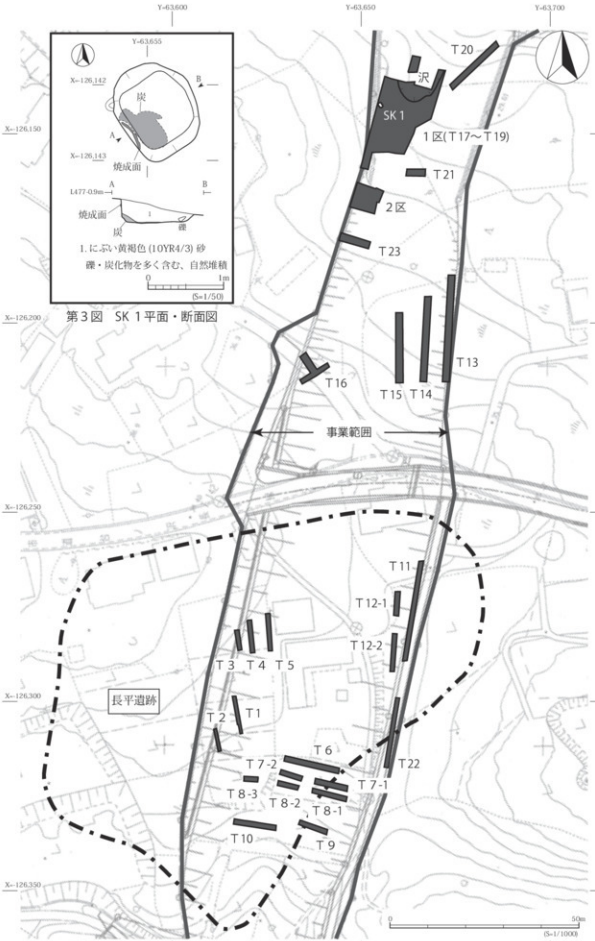
調査地は遺跡の西側と北隣接地で小丘陵の頂部平坦面及び北と南の緩斜面にあたる。平成 20 年 12 月 1 日から、主に切土となる対象範囲に T 1 ～ 23 の調査区を設定し、厚さ 20 ～ 60㎝の表土等を除去して、遺構面である礫混じりの地山を検出した（第 2 図）。その結果、T 2・6・T 7- 1・T 8- 1・T11・T12-1・T12-2・16・17 で小溝・ピット・土坑を検出した（第 2 図、写真図版 1）。そこで、引き続き精査を行い、出土品や堆積土の特徴から T17 の SK 1 のみ遺構と判断し、さらに 1・2 区を設定したが、他に遺構・遺物は発見されなかった。そのため、各調査区と SK1 の平面・断面の実測図を作成し写真撮影を行った後、調査区を埋戻し、12 月 16 日に調査地を事業者に引き渡して調査を終了した。

（3）発掘調査の成果

【SK 1 土坑】

1 区中央西で検出した（第 2・3 図、写真図版 1-2）。平面形は長辺 1.2m ×短辺 1.0 mの隅丸長方形で、断面形は箱型で深さ 0.1m ほどである。壁の一部が被熱により赤変する。堆積土はにぶい黄褐色砂が自然堆積するが、底面付近に炭片が多くみられる。遺物は発見されなかったため、時期は不明である。

第３図　SK１平面・断面図



第２図　調査区配置図

（4）総括

調査の結果、遺構は1区中央西で時期不明の土坑を1基発見したが、遺物は発見されなかった。調査成果と周辺の地形を勘案すると、調査地の小丘陵の頂部平坦面及び北と南の緩斜面の大部分は、近世以降に開発されたとみられる。縄文時代や中世の集落等の遺構は、遺跡の北西部及び北西隣接地の丘陵頂部平坦面と緩斜面に広がると考えられる。

1．1区全景（北東から）

2．SK1（北東から）

3．2区全景（北西から）

4．T6～8全景（北から）

5．T5全景（北から）

6．T11全景（南から）

7．T15全景（南から）

写真図版1　調査地写真

引用文献・参考文献

気仙沼市史編さん委員会 1986『気仙沼市史』Ⅰ自然編

気仙沼市史編さん委員会 1988『気仙沼市史』Ⅱ先史 古代 中世編

気仙沼市史編さん委員会 1998『気仙沼市史』補遺編　考古・古文書等資料

志間泰治・桑月鮮 1991『宝ヶ峯』齋藤報恩会

本吉町教育委員会 1978『本吉町の文化財』

本吉町教育委員会 1979『前浜貝塚』本吉町文化財調査報告書第２集

本吉町教育委員会 1999『平貝遺跡　平貝窯跡』本吉町文化財調査報告書第２集

本吉町誌編纂委員会 1982『本吉町誌』Ⅰ

本吉町誌編纂委員会 1982『本吉町誌』Ⅱ

宮城県　1974『土地分類基本調査　千厩　－５万分の１－』

宮城県　1990『土地分類基本調査　登米・大須　－５万分の１－』

宮城県　1995『土地分類基本調査　志津川　－５万分の１－』

宮城県　1996『土地分類基本調査　津谷・気仙沼　－５万分の１－』

宮城県教育委員会 1979「(8) 南最知遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財調査報告書第 57 集

宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 111 集

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしかわらいせきほか
書名	石川原遺跡ほか
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書
巻次	X
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第247集
著者名	生田和宏・佐藤渉・初鹿野博之・小瀬忠司・岡本泰典
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL 022－211－3684
発行年月日	西暦2018年3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積 （対象面積）	調査原因
石川原遺跡	気仙沼市本吉町石川原	04205	14107	38度50分15秒	141度33分26秒	2008.12.01～12.16 2010.11.01～11.09 2012.09.10～09.14 2015.12.14～12.18 2016.04.12～06.10	2,039m2 (16,600m2)	三陸縦貫自動車道建設事業
道貫館跡	気仙沼市本吉町道貫		62056	38度50分24秒	141度33分32秒	2008.12.01～12.16 2010.11.01～11.09	710m2 (4,300m2)	
卯名沢古墳群 卯名沢貝塚	気仙沼市本吉町卯名沢		62041 62015	38度46分43秒	141度30分39秒	2014.07.28～08.08 2015.06.21・22・27	255m2 (10,300m2)	
台の下遺跡	気仙沼市唐桑町台の下		63009	38度57分46秒	141度37分29秒	2014.02.18～02.19	140m2 (600m2)	
高谷貝塚	気仙沼市松崎高谷		59094	38度52分13秒	141度34分30秒	2008.12.01～12.16	30m2 (600m2)	
寺沢遺跡	気仙沼市岩槻寺沢		59111	38度51分49秒	141度34分3秒	2012.11.05～11.13	310m2 (4,800m2)	
長平遺跡	気仙沼市岩槻長平		59110	38度51分37秒	141度33分59秒	2008.12.01～12.16	740m2 (6,000m2)	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石川原遺跡	散布地	縄文・中世・近世	土坑・柱穴・ピット	縄文土器・陶磁器・石製品	縄文時代前期と後期の土坑、ピット群と中近世の畑跡。
道貫館跡	城館	中世	なし	なし	
卯名沢古墳群 卯名沢貝塚	古墳 貝塚	古墳 縄文前～後・弥生	なし	なし	
台の下遺跡 (隣接地)	集落	縄文・弥生・平安・近世	なし	なし	
高谷貝塚 (隣接地)	貝塚	縄文	なし	なし	
寺沢遺跡	散布地	古代・近世	なし	なし	
長平遺跡	散布地	縄文	土坑	なし	時期不明の土坑。

要約

石川原遺跡では、縄文時代前期・後期の土坑や柱穴、ピットなどの遺構を検出した。遺物は、縄文時代前期前葉頃と後期中葉頃の土器・石器が出土した。現標高60m前後のA区とB区の間の平坦地には、縄文時代前期前葉頃、現標高65m前後のC区西の南東緩斜面には、縄文時代後期中葉頃の居住域が分布すると考えられる。

道貫館跡・卯名沢古墳群・卯名沢貝塚・台の下遺跡（隣接地）・高谷貝塚（隣接地）・寺沢遺跡では、対象地内に遺構・遺物は確認されなかった。

長平遺跡では、時期不明の土坑1基を発見した以外は、対象地に遺構・遺物は確認されなかった。

宮城県文化財調査報告書第 247 集

石川原遺跡 ほか
三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅹ

平成 30 年 3 月 12 日印刷
平成 30 年 3 月 16 日発行

発 行　宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号